

「機関連携」に着目した博物館学への展望

琵琶湖博物館 主任学芸員 戸田 孝



博物館には、各々の専門分野やテーマといったものがあります。琵琶湖博物館では、このテーマを解りやすく伝えるために「湖と人間」という言葉にまとめて表現していますが、このような明示的にまとめられたテーマがないところでも、「○○地域の自然と文化」などというような「管轄」とでもいうべきものがあります。

博物館の使命の1つは、自らの専門分野やテーマに関わる内容についての研究を進めることです。それが、それと並んで、博物館とはどういうものか、博物館活動をどのように進めるべきかといった内容を研究する「博物館学」を推進することも求められています。

博物館の

コミュニケーション機能

伝統的には、博物館学は、博物館資料をどのように取り扱うべきかという「博物館資料論」

を中心に展開されてきました。展示のありかたを研究する「博物館展示論」も、資料を展示という形でどのように取扱うかという側面から、「博物館資料論」の一環として捉えられる場合があります。

しかし、博物館の機能は資料の研究や収集整理(収蔵)だけではありません。この資料に基づいて、学術情報を広く伝えていく「社会教育(生涯学習)」機能も求められています。

この2種類の機能をコレクション(Collection)とコミュニケーション(Communication)という英語の頭文字を取って「2つのC」と呼び、博物館機能の両輪と考える場合もあるようです。例えば、展示というものには、この2種類の機能の接点に位置していると考えられます。伝統的に「教育普及」と呼ばれてきた交流サービス活動は、主としてコミュニケーション機能に重点を置いた

活動だと言えるでしょう。

歴史的に見て、博物館はコレクション機能から発祥し、時代を追うごとにコミュニケーション機能を重視する方向へ進んできている傾向があります。そして、最近、この傾向がますます強まってきています。その背景には、「物質的豊かさから精神的豊かさ」への指向の変化に基づく生涯学習への期待の高まりや、学校教育の「画一的な詰め込み」への反省が社会教育施設などの活用を指向していることなどがあられるでしょう。

コミュニケーション機能に関する研究は、最終的には個々の利用者との関わりを目標にしていますが、ここではその一歩手前の段階にあたる「博物館と他の機関との連携」に関する課題について見てみたいと思います。その中でも、特に2種類の機関との連携が、最近話題になってい

です。1つは学校との連携、もう1つは他の博物館との連携です。

学校との連携

日本における博物館の歴史を振り返ってみると、明治時代のうちは「学校教育で必要な教材を貸し出す」機能が重視されていたことが解ります。しかし、学校現場の設備や教材が充実していくにつれて必要が薄まり、日本の博物館は収蔵資料の管理や研究に重点を置く方向へと機能を変えて行きました。

その後、単なる教材貸出とは違った側面での学校との連携が注目されるようになってきます。この注目が爆発的な勢いで広がる契機になったのが「総合的な学習の時間」の実施です。この授業は1998(平成10)年ごろから実践的な準備が始まり、2002(平成14)年から本格実施となった

ものですが、各学校単位あるいは各教師単位でのカリキュラム開発が強く求められます。その手段として社会教育施設を活用しようという考え方が出てきたわけです。この方法は文部科学省が出した指導要領等でも推奨されています。

ところが、学校が博物館を利用しようという初期の試みの多くは、互いのストレスになるだけでした。典型的なのは、新聞報道などで「学校から博物館への丸投げ」と呼ばれた現象です。博物館の利用法が十分に理解できていない学校が、深く考えずにただ児童生徒を送り込んだり電子メール等で質問させたりし、博物館側がまともに対応しきれなくなるという現象です。しかしながら、一方の博物館側も、最初のうちは学校の事情が解らず、どんな準備をすれば良いのか解らなかつたのです。

学校と博物館には、同じ教育機関ではあるものの、いくつか大きな違いがあります。その1つに「カリキュラム」に対する考え方の違いがあります。学校(特に高等学校まで)のカリキュラムは、児童生徒の人格形成全体を見渡す必要がある。「網羅的」な側面を有する必要があります。つ



▶ 伯母川博物館の授業で、琵琶湖博物館に訪れた児童たちに実地で講義する学芸員

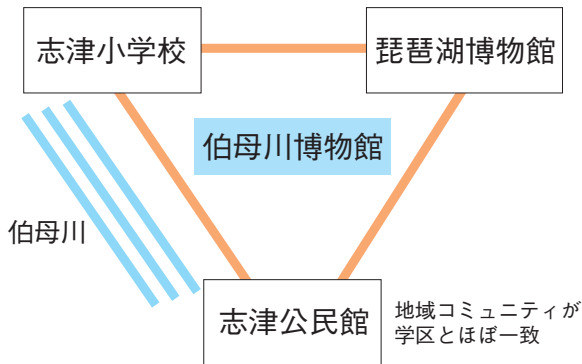
▼ 志津公民館で公開された伯母川博物館で、来館者に説明する博物館教員



まり「ひととおりのことを全部扱わなければならない」ということです。それに対して、博物館のカリキュラムは「その場で完結」してしまう傾向があります。それは、博物館というもの

が各々の「専門性」「テーマ性」をアピールすることを使命としているからです。

学校と博物館の連携を適切に進めるには、この違いを双方がきちんと認識して行動に結びつける必要があります。例えば、学校が博物館を「素材となる教材」の供給源と見る視点が必要でしょう。各学校のカリキュラム全体の中で、博物館などの「学校外の施設」をどのように位置付けるのかという立場を明確にできるのは学校自身です。その立場に応じて学校は博物館が提供するものを選択するべきだし、その選択を効率的に行うために必要な情報を、博物館自身



伯母川博物館の事業における連携の概念図

西垣 (2004) の口頭発表資料による
学校と博物館のみでなく、地域の機関である公民館を含めた3者の連携によって、地域に根ざした活動を目指したところに、この事業の特徴がある。

はもとより、学校教育を支援する立場の人々が学校に提供する必要がありということです。

2000 (平成12) 年ごろから、学校と博物館とがうまく連携できた成功事例が教育関係の学会で多数報告され、蓄積されるようになりました。

琵琶湖博物館が関わった「伯母川博物館」(草津市)の事例も、顕著な成功例と考えられています。しかし、突出した成功事例を積み重ねるだけでは不十分です。その事例がなぜ成功したのか、他の不成功事例と何が違うのか、そして、この成功体験を「ノウハウ」として整理し、他の多数の学校に広げて共有するには何をす

博物館同志の連携

れば良いのか、というあたりが注目が集まり始めています。

例えば、昨年ごろから注目されているのが、「サイエン スコミュニケーション」という概念の中での位置付けです。これは、科学の専門家、伝える立場にあるメディア等、そして一般の人々との間の意思疎通のことです。その中で、学校教師自身が博物館等との関わりを通してサイエンスコミュニケーションの一翼を担うという考え方で、授業展開を進めていくうえでの諸問題を整理して行くことが試されています。

博物館は互いにライバル同志の関係にあり、同時に共通のノウハウや利害関係を有しています。ですから、業界団体も古くから存在しています。しかし、その主な活動内容は、博物館に特有の専門技術を研修などの形で情報交換する活動に限られる傾向がありました。

それに対して、いくつかの博物館が連携して、広報やイベント展開などの形で、業界の外に向かってアピールする活動が、最近では従来以上に盛んに行われるようになってきています。それは、おそらく「活

動成果や存在意義を形にして示すこと」が要求される時代になってきていることが背景になっているでしょう。

このような活動を進めていく中で、多数の博物館が連携することによる「スケールメリット」が有効であることが実証されつつあるように思えます。広報活動は、効果的に進めようとするとしても規模が大きくなり、個々の博物館、特に小規模館にとっては手に余るものになってしまっています。多数の博物館施設が共同で行うことによって、各館の負担を最小限に留めたまま大きな効果を得ることができ

るわけですね。

本号の特集で紹介した滋賀県博物館協議会の活動も、このような効果を期待して進めているものです。このような実践の積み重ねを通じて、博物館活動の効果的な進め方を明らかにしていくことができればと考えています。

〈参考文献〉(一般向けの文献に限りません)
戸田孝(2003)、湖国の博物館いろいろ、湖国と文化、105、18-31
谷口雅之(2004)、学校のよりよい博物館利用をめざして、うみんど、32、1-3
中村大輔(2004)、地域の人と人をつなぐふるさとの博物館、うみんど、32、7
布谷知夫(2005)、博物館学ってなんだろう、うみんど、35、5-7